

認 — Moratoriums —

定

猶

予

Asa.T

ひどく冷たいのひらだと思った。

人のぬくもりなんてもう何年も前から知らないけれど、それでも記憶の中にある人間の体温はもっともっと高くて、じりじりと焼けるように高くて。

己の存在自体を焼き切ってしまうんじゃないかというくらいに。

水晶の鋭さにも似た、一回り大きな掌。少し伸びた爪の先。鼻をつく煙草の匂い。呼吸も、心音も。けれど。

そのてのひらは冷たいのに、ひどく愛しいと思った。

赦されるということ

地上五階にある事務所の扉を蹴破る勢いで、パンツスーツの女性が入ってきた。

赤めの髪を後頭部で器用に纏めて、その表には色つきフレームの眼鏡。職場からそのまま抜け出してきたかのような出で立ちは、彼の煤けた事務所には不似合いだった。

「相変わらず汚い部屋ねえ」

書類なのか紙屑なのか分からないもので溢れた棚や机。応接用のテーブルの上にまでそれは積み上がっていて、到底接客には向かない。扉を開けた反動で雪崩れたその山のひとつを拾い上げながら、女性は澆刺と声を張った。

「シロいるー？」

光源も少なく、薄暗いままの部屋。しかし反応があった。埃の舞い上がる光の中に紙の擦れる音がして、また別の声が答える。

「なんだ朝っぱらから、うるさい奴だな」

返事をしたからには、彼がシロという人物らしかった。男はとても億劫そうで、証拠に読み耽っていた新聞からは目も上げない。そんな態度にも慣れていているらしい、眉を顰めて見せはすれど、お互い取り立てて気分を害する訳でもないようだった。

「随分な言い草ね。どうせ暇だろうと思って仕事持ってきたんでしょうが」

新聞のスクラップらしい紙の束を手近な山の頂上に乗せた。山は絶妙なバランスを保ったまま、そのすぐ脇で女が仁王立ちしても再び潰えることはなかった。

反対に二人のやり取りにはらはらしているのは、部屋の隅に居た少女だった。自分用に宛がわれた事務机でパソコンと格闘していたのを中断して、突然の来客と上司の言い合いに明らかに顔色を変えている。元々高くない背を更に萎縮させ、今にも紙束の影に埋もれてしまいそうだった。

その姿に気き、女が明るい声を発した。

「あら、助手さん？ やっと雇ったのね」

視線が自分に向けられて、脅えながらも会釈を返す。それが精一杯だった。ふわりとしたシルエットのワンピースにボレロ。淡い色合いも兼ね合って、今にも消えてしまいそうな儚さがあった。

「かわいい子ね。はじめまして。あたしは高座灯。アカリちゃんって呼んでね。あなた、お名前は？」

アーモンド形の瞳が揺れる。薄桃色の唇が恐る恐る開かれるのを遮って、シロがぱたぱたと腕を振った。

「おーおー可愛いだろ。お前と違ってな。だからあんまり吠えかかんな、脅えさすな」

「本っ当、客人に優しくないのね」

「身内と依頼人には優しいさ」

「だから依頼だって言ってるでしょ。はいこれ。迷い人探し」

眼前に突き出されたのはA4サイズの安っぽい紙と一枚の写真だった。自分が持ってきた依頼だということに女からそれ以上の説明はなく、仕方なく彼が自ら目を通すことになった。

紙切れのほうは尋ね人の張り紙のコピーで、そこに乗っている男の顔が幾分か鮮明に映っているのがもう一方の写真だった。

男の左手が灰皿の喫い掛けを探る。銜えざまに引き出しの上段から100円ライターを取り出せば、忽ち彼の輪郭を紫煙が包んだ。

「って、また厄介な。これ、どう考えても向こうに行ってるんだろ」

「迷い人なんてそんなもんでしょ。ミレンばかりあって、自分では帰れない」

「浮かばれないねえ。可愛そうなのは誰だってな」

彼の目が同情を含んだまま、写真の男に注がれる。屈託なく微笑んだ口元が、余計にもの悲しさを感じさせる。

光沢紙の表面を灰色の煙が撫でる。

「どうせ暇なんでしょ。身体鈍らないようにたまには運動したら？」

意地悪く、それでいて妖艶にその口角を引きつらせる。かちり、アメシスト色のフレームを押し上げながら。

一方の男、シロは相変わらず苦笑めいた溜息を零すばかり。

「そうだな。恰好の暇潰しだ」

着古したとしか言いようのないスーツと、不釣り合いなほど真っ白なシャツ。それが彼——シロの私服であり仕事着であり正装だった。革靴も擦り切れてボロボロ、頭もかろうじて櫛を通してあるものの、整髪料や何やらで整えているようには見えない。

首元にネクタイは見えない。助手の少女が此処で世話になってから今までも、ネクタイを締めている姿などは一度も目にしていないだろう。男にとってはそれが正しいのだ。ネクタイにしろマフラーにしろ、首に巻きつけるものは好きではない。人間の中には身が引き締まるだとか気持ち切り替わるだとか言い訳をつけているが、シロにすればただ息苦しいだけだった。同じ理由で腕時計も外している。お陰で彼のポケットには常に煙草の箱と目薬と腕時計が陣取っている。外出する際には此処にライターが混じる。

アカリの帰った部屋には再びシロと助手の少女と静寂が残った。今やその静けさは風圧で回る換気扇の音さえ打ち消して、けれどその空気感には男には落ち着けるものだった。

煙草の先を潰し直すまでに余り時間は要さなかった。空いた手で新聞を畳み、まだフィルムを開けていない箱を引き出しの奥から引っ張り出してポケットに押し込む。その間も少女は緊迫した面持ちで、もしかしたらさっきのアカリの件で驚いたままなのかもしれないと、気に留めることもしなかった。

けれどそれが見当違いだったと、シロは直ぐに気づくところとなる。

「じゃあ、ちょっと行ってくるわ」

「あ、あの――白城さん」

男の言葉にほとんど食い掛かる勢いで声を上げた。それはシロの動作を一瞬止めるだけの威力を充分に持っていた。もしかしたら、今日初めてその声を聴いたかもしれない。否、灰色の空では昼夜の基準など時に曖昧になるのだが。同時に、その声は既に聴きなれていて、今更鼓膜に届いたとしても不快な思いにはならない。

けれど、意外だったのは確かだった。少女がこうも必死に呼び止めることなどなかったから。いつもより少し大きな声で男の名を呼んで、その割には二の句を探しかねて、勢いで立ち上がったままもじもじと自らの袖の引っ張っては正した。

「いえ……その……い、いってらっしゃい」

やっと絞り出したのがその言葉。明らかに途中で諦めたと思えない、ふいにしゅんと下がってしまった両肩。そう、確かにちらちらと様子を窺う視線に気づいてはいたが。

だから、今も座り直すことも出来ないままの小さな体を見遣って。どことなく泣き出す手前の迷子でも見ているような気持ちになって、自分でも驚くくらい優しげな声をかけた。

「ハルも一緒に来るか？」

「あの……でも、いいんですか？」

ぱあっと桜色に染まって見えた両頬に、くすりと笑い返して。

「いいも何も。お前は俺の助手だろ」

それから勿体付けて、ああ、いや、と煮え切らない態度を演出してみる。

「勿論、ハルが来たければ、だけど」

「行きます。行きたいです、一緒に」

人形みたいな両手を懸命に握り込む。ぐっと意気込んでは少し恥じ入りながら、さっきまで彷徨わせていた瞳でシロを見上げた。

だから男は益々少女を可愛らしく思う。まるで良く懐いた愛玩動物のようだ。拾ったばかりの。それではさしずめ捨て犬だろうかとか可笑しくなる。もしかしたら自分は犬派だったかもしれない。けれど、喜怒哀楽を全身で表すそれよりは。

「くれぐれも、はぐれるなよ？」

分かりきった忠告にも、ハルは機嫌を損ねたりしない。あっという間にぱたぱたとシロの傍までやってきて、今か今かと出立を待ち焦がれている。

加えて、はい！と元気よく頷く様子は、少なくとも雑種のように見えなかった。

時計の針を少し過去へと戻そう。

あれは数日前か数週間前か、ともすれば数年前の出来事。埃塗れの、教室一部屋くらいのワンフロア。室内はごちゃごちゃと机や棚が押し込まれていて、実際はもっと狭く見えた。

その部屋のドアを開けて、ひとりの少女が入ってきた。真っ白なワンピース姿の、まだ幼さを残した面影の女の子。彼女はどこかぼんやりと夢でも見ているような面持ちで部屋の中を見渡した。そうして、ブラインドに仕切られた窓の傍、煙草をふかしている男の存在に気が付いた。

「いらっしゃい」

N極とS極がお互いを引き寄せるようにして、視線が合った。男は突然の来客に動じることもなく、むしろ歓迎の笑みさえ浮かべて少女を迎え入れた。

「あの」

少女がやっと声を上げた。所在無げに胸の前で指を弄び、今更ながらドアを開けてしまったことを後悔したのか、申し訳なさそうに視線を落とした。

「ああ、そうか。客じゃないんだな」

納得したように男は頷く。益々少女は萎縮して、けれど逃げ出してしまう様子はなかった。

「あの、ええと」

だから男は、穏やかに声をかける。

「お前、名前は？ それくらいは分かるだろ？」

ふわりと苦い香りが喉の奥に届く。煙草の匂いだと分かって、鈍っていた彼女の思考回路に働きかける。

「遠野悠花、です」

まだ緊張したままだけれど、それでも幾分ほっとした表情で少女が答える。二人の距離が一分近くなる。シロは今聴いた音をトオノハルカ、と復唱し、それから机の上にあった新聞紙を四つに畳んだ。

「どんな字を書くんだ」

黒の油性マーカーと新聞紙がぐいと少女のほうへ突き出される。その行動の意図するところを汲み取って、悠花はマーカーの蓋を引っ張って外した。

さらさらと慣れた手つきで自分の名前を書く。けれど控えめに、記事の邪魔にならない場所を選んで。

その文字列に視線を走らせる。華奢だけれど丁寧な文字。まるで悠花という少女の性格をそのまま表しているような。細身の四文字を何度か音と合わせて読み返して、

「一一よし。覚えた」

小さく顎を引く。それから新聞を事務机の一番下の引き出しへと仕舞った。

「それで、お前は此処でいいのか？ どこか行きたい場所はあるのか」

途端に悠花の表情に困惑と不安の色が混じる。無理もないと思った。きっと彼女だって好き好

んでこの部屋のドアを開けたのではないはずで、だからといってこの辺りに詳しいわけでもないだろう。

「よく、分かりません」

案の定、消え入りそうな返答がある。折角狭まった一步がふらりと退けられる。けれど、男は気分を害したふうではなかった。反対に気遣うように、そうか、と静かな視線を向ける。

「なら此処にいるといい。何処か行きたい場所が出来るまで。此処はそういう場所だからな」

悠花の瞳が、じっと男の顔に注がれる。警戒しているのかもしれないし、この男がどのような人物なのか確かめようとしているのかもしれない。彼の言動の真意を欲しているのかもしれない。

やがて詰めていた息を、ふと解放する。それを感じ取って男もやっと肩を下した。

「自己紹介がまだだったな。俺の名前は――確かこの辺に名刺が――ああ、あった」

がさごそと机上の書類の山を崩しながら小さな紙切れを見つけ出す。透明の敷板に挟んでいた、少し色の褪せた紙片。それを彼女の目の前に差し出す。

紙の上にはタイプライターのフォントで事務所の名前と住所、連絡先。中央に他より幾分か大きな字で並べられた四文字。

『白城史朗』。

それこそが彼の名前らしかった。

古い名刺で悪いな、と顎をなぞる仕草をする。悠花はその小さな名刺を、落とさないように両手で丁寧につまんで支えた。

「ちょっと読み辛い名前なんだ。言っておくがシロシロシロウじゃないぞ」

読めるか？と問われたような気がして、じっと彼の名前を見詰める。それから、一呼吸の後に能動的に唇を動かした。

「シロキフミアキ」

「おう。勘がいいな」

ほう、と感心の息を洩らす。しかし悠花の表情は翳ったままで、それでも先刻よりは、真っ直ぐに白城の顔を見られているようだった。

少女は、悠花はこの場所にいることを選択した。それが彼女の強い意思ではなくとも、要望でなくとも、それでも迷子のような彼女にとっては、この出逢いは救いのように感じられた。

今は右も左も分からなくても、いつか自分で道を選ぶ瞬間がくるかもしれない。その時はその時で構わない。白城が先に述べた様に、此処はそういう場所なのだ。彼らはもう自由に選ぶことが出来る。本当に居たい場所も、本当に持っていたいものも、全て自分で決めることが出来るのだ。

未来よりはいくらか片付いた状態の応接セットの、テーブルとソファを占拠していた資料の隙間を縫って悠花が座れる場所を作った。促されるままに少女は腰を下ろし、灰皿に潰された紫煙とカップから立ち上る湯気を眺めた。二つの違いは今の彼女には区別がつかなかった。

「さて、本題だ。落ち着いてゆっくり聞いてくれ。ハルはどうして自分がこんな場所に居るのか、分かるか」

今思えば、彼女のことを愛称で呼んだことさえ彼の優しさだったのかもしれない。呼びやすさも含めて、これから少しの間でも時間を共有する相手への距離の詰め方だ。

或いは、先人としての。上司としての。

いつか、呼吸よりも簡単に、別々の道を歩む瞬間がやってくる、それを頭の隅に置きながら。

それが記憶の中の、彼らの初めての出会い。

埠頭の倉庫街というものは、どこまでも探偵らしい場所だと思つづく思う。

それを誰から教わったということでもないけれど、閑散とした灰色の海、カモメの声、貿易船の汽笛。どれもが霧に隠れて曖昧で、まるで自分自身の存在さえも背景の一部になってしまったかのような、それでいて何もかもを一步後ろから眺めている第三者の感覚に陥る。

ここが、白城の場所なのか。

潮風で錆びたシャッター、薄く紗のかかった硝子窓。剥き出しの鉄筋。終焉の地と形容するに相応しい光景だった。生きているものの気配が、とても薄い。

「ハル？」

直接声が響いて、悠花は瞬きを繰り返した。途端に波の音が近くなって、自分の足元がコンクリートだということ思い出す。

「あ……すみません。少し……ぼんやりしていました」

素直に答えると、にっと快活な笑みが頭を撫でた。数瞬前まで見詰めていた筈の白城の両目は既に物思いに耽ってはいない。もしかしたらそれ自体悠花の思い過ごしだったのかもしれない。

「もう行くか」

「はい」

揺蕩(たゆた)う白色の煙に視線を奪われながら。残念なことに、海風の塩辛さを感じることは出来なかった。

繁華街までは僅かに十数分。交通機関を使えばもう少し早く辿り着けたらろうけれど、幸いにして時間は充分にあるためにのんびりと足を運ぶことになった。

海の気配が遠くなる度に人の生活の気配が強くなっていく。駅の近くまで行けばアーケードに溢れる大勢の人々を目にすることになり、散見されるセーラー服の少女達は、誰彼も笑いながらお喋りに花を咲かせている。

楽しげな表情に思わず目を奪われていると、隣を歩く白城が彼女に尋ねた。

「この辺は初めてか」

悠花は僅かに思案したあと、戸惑いがちに首を傾げた。

「よくわかりません。見覚えはないように思いますけど」

「ハルは高校生だったんだっけか」

その左手がポケットを探っているのを見つけて、歩き煙草はよくないですよと窘める。そうすれば白城は観念したように両手を上げてみせる。

「はい。でも、知らない制服ですね。やっぱりこの辺は私の住んでいた場所じゃないのかも」

「そうだな。ハルくらいだったら覚えてるはずだもんなあ」

すれ違う人にぶつからないように、器用に人の波を掻き分ける。それに置いて行かれないように、ぴったりと彼の横に付き従う。

「お前、俺んところに来てどれくらいになる」

「まだ半月くらいですね」

そんなもんか。と、意外そうに眉を上げるのは白城だった。

「なんだか随分長いこと一緒にいる気がするな」

通りかかったカフェのオープンテラスにも窺える、テーブルを囲んで談笑する少女達の姿。こちらは制服姿ではないけれど、やはり年の頃は十代半ばというところだ。

「お前も少し前までは、ああして過ごしてたんだもんな」

嘆息に似た呟きは悠花の耳にも届いた。見上げれば視線は真っ直ぐ道の先を見るばかりで、既に悠花のほうを眺めることもない。

表情は穏やかだった。普段通りの白城の姿。けれどよくよく注視すれば、眉の端が僅かに下がっている。それは一種の癖なのだと、悠花はもう知り得ていた。

「けど、惑わされるな。意識を取られすぎるな。帰れなくなるぞ」

電光掲示板の示す昼下がりの時刻。賑わいを増す街の中心地。その只中に紛れる二人の姿など、行き交う人々の誰も気にかけてりはしない。

カチリと、また新しい生の時間が刻まれる。

まずは情報収集だと白城が言い、二人は『情報屋』の所在を探すことになった。

とは言っても、情報屋の活動圏は限られるそうで、二・三当たりをつけている場所を巡ってみれば簡単に捕まえることができるらしい。

案の定、並木通りの喫茶店でかちゃかちゃとキーボードを叩く彼の姿を発見した。その風貌を見て悠花は些か驚嘆する。白城が懇意にしている情報屋だということには壮年の渋い男性かと思っていたのに、彼が手を挙げて合図した相手は、まだ二十代初めくらいの青年だった。

縞のシャツに白色のニットなどを合わせ、顔つきは線が細く中性的。同性の目でも分かる、いかにも爽やかな好青年といった感じだ。

目が合えば、白城が歩み寄ってくるのを認める。けれど唯一奇妙なことに、一人がけのテーブルで彼は微笑さえ浮かべて喋っているように見えた。一体どういうことなのかと悠花がいぶかしむのも数瞬で、よく見れば耳に付けたインカムマイクで誰かと通話しているらしかった。

「――じゃあ、また直ぐに。よろしく」

「相変わらず忙しそうだな、沙月」

通話の終わりを待つか待たないかというタイミングで白城が声をかける。沙月と呼ばれた青年は寸分の狂いもないにこりとした笑みを浮かべて、

「そういうシロさんは相変わらず暇そうだね。あれ？ 知らない子がいる」

青年の目が白城の傍らの少女に留まる。悠花は白城の背後で萎縮し、やっとの思いで小さく頭を下げた。

「隠し子？ それとも恋人？」

「残念ながら助手だよ」

呆れた心情を隠すこともなく、溜息を吐き出す。

白城は振り返り、ポケットから両手を出すこともなく顎で示した。

「こいつが沙月だ。雨原沙月」

名前を呼ばれて、再びにこりと微笑む沙月。

悠花は軽々と言葉を交わす二人を交互に眺めていた。少なくとも悪い人ではなさそうだ。ただし、もしかしたら怖い人なのかもしれないとは気構えしながら。

「はじめまして。キミは何ちゃん？」

「答えなくていいぞ。からかわれるのがオチだからな」

「僕だってかわいい子を虐げたりしないよ」

まあ、苛めたりはするかもしれないけどね、等と付け加えるので、益々白城の表情が不快そうなものになる。けれども彼のそれは旧知の仲の相手に向けられるものだと見て取れたので、悠花もまた不必要に困惑する必要もなかった。

「遠野悠花です」

「ハルカちゃんか。可愛い名前だ。よろしくね」

あまりにも自然に褒めるので、つい視線を逸らしかける。けれどそれが失礼なことだというのは、あまり物を知らない悠花にも分かった。だから懸命に、よろしくお願ひします、と頷き返して。

「それにしても、まだ若いのに。大変だったね」

今の今まで白城を茶化していた彼の、色素の薄い目が僅かに細められる。

つられて微笑みかけていた悠花は表情を正し、いえ、と口の中で答えた。それから控えめに白城の顔つきを窺う。

「そういうしみったれた話は後にしろ」

懐から引き出した紙の箱から一本を取り出す。沙月の向かい側、オープンテラスの一角にどかりと座る白城の姿は、なんだか不似合いだった。おまけに屋外とはいえ分煙スペースである。沙月は、今度こそ困惑の眼差しを彷徨わせる悠花へ着席を促し、

「とりあえず、15分なら」

あからさまに白城が怪訝な顔つきになる。これには肩を竦めた。

「待ち合わせなんだ。僕だって忙しいんだよ。来週にはゼミの中間発表があるし、そろそろ就職活動だってしなきゃいけない」

沙月の背後に立ったままだった悠花には、彼のパソコンの液晶ディスプレイが見て取れた。それから、白いテーブルの上に積み重なった数冊の本。どうやら民俗学らしい。『境界論』と書かれているが、他にも目に止まった単語から察するに――彼岸と此岸の境。

「気になる？」

思わず拾い読んでいた彼女の思惑を、沙月が遮断する。少女は我に帰り、すみません、と慌てて頭を下げる。

「本当はこんなもの、僕の経験で打破できちゃうんだけどさ。ああ、逆かな。余計に複雑になるかな？」

「俺に聞くなよ」

眉根を寄せながら、ふうっと灰色の息を吐き出す。白城はどうも彼の話に興味がないようだ。けれど悠花はそうはいかなかった。沙月が視線を注いだままキーボードを叩く様子を食い入るように見詰める。

「死者と生者の違いなんて些細なものだよ」

手を動かしながらも、器用に少女に語りかける。少女が胸の前で僅かに拳を握ったのには気づくこともない。

「物を考えるか、考えないか。自分を大事にするかしないか。心臓が動いているか。魂なんてどこにあるかも見えないのに」

視界の端で白城がちらりと悠花を確認する。そして相変わらず興味がなさそうに、眼前の煙と共に青年の持ちだした話題を振り払う。

「それより、こっちの話だ。15分しかないんだろう。それとも心の広い沙月は時間を延長して

くれるのかね」

「――っと、そうだった。じゃああと10分だ。仕方ないから簡潔に、手短かに話してくれる？
シロさん」

雨原沙月の笑顔は、どこまでも完璧だった。

立ち上る白煙を眺めながら白城は、探し人の名前や生年月日などを端的に述べた。

ごくごく平凡な、ありふれた名前、年齢も職業も、とりたてて特異ということもない。日々の生活に疲弊してふらりと姿を眩ましたような、そんな理由が至極妥当に思える、そんな人間の話だった。

「以前はしががない会社員で、公私ともに平凡で幸せな生活を送っていたらしい。探しているのは配偶者、つまり奥さんだな。外見は中肉中背、顔つきは少しぱっとしない感じだ。写真がある」

ノートパソコンのキーボードの上にべらりと光沢紙を落とす。沙月はそれを打鍵の邪魔にならない場所までスライドして、数秒の間だけその『顔』を眺めた。

「詳しい素性は必要か？」

「いや。ああでも、出身地や戸籍元くらいは分かったほうが手っ取り早いね」

それには一枚のルーズリーフを渡し、沙月はそれを見ながら情報をパソコンに取り込んでいく。

一方悠花は、青年の指さばきを興味深げに眺めていた。結局情報屋と同じテーブルにつくことはなく、かといって周囲に開いた席もないので、短時間であれば起立したままで充分だと判断したのである。

元々、パソコンをはじめとした電子機器は不得意だった。だから沙月のように様々な端末を使いこなす人間を見れば、目を奪われずにいられない。それに気づいてか否か、タイピングの音もしないくらい滑らかに文字が並んでいく。

「どれくらいかかりそうだ」

お互いに、お互いの顔を見ることもないまま。運良く悠花の立ち位置からは、並木通りから向いた白城の視線と、軽く頷いた沙月の様子の両方を見て取ることができた。

「そうだね、3日もあれば充分かな。ただ、さっきも行ったように、ゼミの発表が控えてるからね。それも踏まえて1週間は欲しい」

写真とルーズリーフをまとめて白城の側へと突き返す。知らずのうちに詰まらせていた息をふっと吐けば、その様子を偶然眺めていた白城がにやりと笑う。嗜められたように感じて、悠花は肩と背中とを萎縮させる。

「時間なら、いくらでも。ただ、あまり遅いと手遅れになりかねない」

「そこは重々承知だよ。だから、1週間以内だ」

ほぼボランティアなんだから承知してよね、と笑顔を浮かべる情報屋。すっかり毒気を抜かれたのか、白城は伸びっぱなしの爪でがりがり頭を搔いた。

それでも、時間をかける価値がある程には彼の情報網は信頼が置けた。今までの経験と実績。白城には真似できない、彼の性格と立場に強く裏打ちされた『結果』だった。

ふと柱に括られた時計を見あげれば、先刻タイムリミットを譲渡した頃から既に十分が経過していた。悠花は落ち着かない様子ではらはらと並木通り人の波を見た。沙月に対して合図を送るものはいないか、待ち合わせの相手が来るのではないかと、当の本人がまったりとカップチーノを味わう様子を盗み見る。

と、沙月のイヤホンマイクのスイッチがぴかぴかと光を発する。沙月は彼らとの会話中もずっとそれをつけたまま過ごしていた。時折点滅していたのを見ると、彼が忙しいのは事実で、もしかしたら白城達に申告している以上にスケジュールが詰まっているのかもしれない。

「――あ、もしもし。――うん、分かった。いつもの場所にいるから」

今回は僅かに一言二言をを交えて終話する。それから、そろそろ時間切れかな、と腕時計を眺めて顎を引いた。

「それにしても、こんな奴についてていいの、悠花ちゃん。随分振り回されてるんじゃない？」

「――また蒸し返すのか」

積み上げた古いハードカバーの本をぱたぱたと閉じながらも意欲的に叩鍵する。少女が首を傾げる姿は可愛らしく、対して白城の方はと言うと、煙よりも苦虫を噛んだが如き表情。

「だって、どう考えても変でしょ。それに生産的じゃない。こんな冴えないおっさんのところに居るなんて」

花壇の片隅で吸い潰された吸殻。マナー違反だとは思いつつ、彼らにそれを正す力はなかつた。だから、遣り方を茶化されたとしても怒りなどは覚えもせず。代わりに、

「生産性なんて最初っからねえんだよ」

言葉は独白や懺悔にも似た響きで、もう一本に火をつけた白城の顔つきに苦笑を溢す。

だから、反対に沙月は眉を下げてみせた。

「もし嫌になったら言うんだよ。僕で役に立てるかは微妙だけど、協力はするから」

本気なのか冗談なのかも判別しかねてしまう穏やかな目元と口元。謎めいた感情、どちらかと言えば、同情よりも励ましの言葉に聞こえた。

これに対する少女の『意志』はいつからか強く定められていた。

「いえ。私には他に行く場所もないですし。それに」

心配してくれる沙月の言葉を捕まえて、今までの自分の生活を振り返る。事務所のこと、外での仕事のこと、留守番のこと。自分を取り囲む世界のこと。いつだってそれは悠花を穏やかに甘やかして。

「それに、白城さんは親切なかつたですから」

そして、その筆頭には誰あるう白城史朗その人に他ならない。

本心から訴える微笑。疑うこともなく信頼している表情。独りよがりの思い込みなどでは決してなかつた。彼女にとっては絶対的な現実。今いる世界こそが、遠野悠花の辿り着いた場所なのだ。

「そっか」

悠花の思うところよりもずっと簡単に沙月は頷いた。もしかしたら、最初から返ってくる答えを知っていた――確信していたのかもしれない。彼女の本心を所在を、彼女の瞳の中や僅かな口元に見出しながら。

「それならいいんだ。でも、愚痴くらいならいつでも聞いてあげるからね」

余計なお世話だ、と溜息と共に、悠花の代わりに自ら名誉を挽回する白城。沙月の、にこりというよりもニヤリと形容出来るような笑みにつられて、思わず一生に付した。

彼の連れが悠花達の視界の隅に映ったのはその直後だった。仕切り代わりにテラスを書こう植え込みの向こうで、こちらに手を上げる、沙月と同年代くらいの青年の姿が見えた。

「いたいた、慧！」

応えるために片手を上げ返す沙月を、悠花は不思議そうに眺める。

「確か、沙月って名前じゃ」

ノートパソコンの蓋を閉めて立ち上がる青年。彼はなんでもない事のように頷いて、それから秘密を隠した微笑で顔の前に人差し指を立てた。

「それは仕事用の名前。厳密に言えば、昔の名前なんだ」

「こっちはこっちで、情報を集めないとな」

錆びの目立つ事務所の扉を、まるで何日ぶりかという思いで引き開ける。

相変わらず紙の溢れた部屋。それも古新聞や、昔に扱った『事件』の記録媒体ばかり。本当は捨ててしまって構わないものばかりだけれど、もう何年も片付かないでいた。

悠花が此処に来てからも日々目にしている光景は変わらない。スチール棚や書類ラックに形ばかりも整理されたものたち。使っていない事務机の上に重なったファイル。けれど、それに不必要に触れることはない。彼女は彼女なりに弁えているのだ。

「とはいえ、まずは小休止だ」

「はい」

白城が新聞の一部を手にとったのを見て、悠花は給湯室へ向かった。

珈琲を入れるのは彼女の仕事だった。サイフォンにフィルターをつけて、豆を計る。深い暗褐色が綺麗に出るのを待ち、彼の愛用のカップに一杯を注ぐ。

丸盆を抱えて事務室を見渡せば、白城は来客用ソファの背の側に腰を預けて棚の新聞を漁っていた。

先刻の新聞はテーブルの上においたまま。悠花は少し考えて、事務机の横を回って彼の居るソファへと近づいた。

いつもの彼女なら、こんなに手狭な動線であっても難なく掻き分けて通れるはずだった。けれど悠花は自分の違和感に気づいていなかった。頭痛を覚えるのは久々で、同時に慣れた感覚で、だからその痛みが意図するものが判らなかった。

珈琲を、と口に出しかけた瞬間、重く引きずった左足を、床に積み上がっていたファイルに阻まれる。上手く避けることが出来なくて、戸惑って手をついた机の上にまた別のファイルがあった。

滑り落ちる紙の束。頼みにしていた先が崩れて、重力のベクトルに従って体が傾いだ。

とっさに両目をきつく閉じる。けれど、覚悟していた床の冷たさも紙に埋もれる感覚も訪れない。代わりに少女の鼓膜を震わす穏やかな声。

「大丈夫か？」

開きなおした瞳の端で捉える、床に転がったマグカップ。

散らばった古新聞。右肩と腰の辺りに、苦しいくらいの圧迫。煙草の匂い。

「あ……はい。すみません……」

やんわりと開放されて、自分を支えてくれたのが白城だったのだと気づいた。消え入るような返答に、前髪に隠れてしまった表情に、白城が苦笑を溢す。それから、あーあ、と息を吐いて、「珈琲。せっかく淹れてもらったのにそっちまで手が回らなかった。ごめんな」

「そんな、私が、ぼんやりしてたから」

ぱっと振り仰ぐ薄い色の瞳。ふるふると揺れる肩にかかった髪。少女はぐるりと背を向けて、
「すみません。今片付けます」

「いいよ、俺がやる。それより、あちこち引っ張りまわされて疲れてるんだろ」

布巾を取りに帰るその肩を捕まえて、落ち着かせる。声をかければ、悠花は不思議そうに見上げてくる。

けれどその目は、やはり緩慢で重たそうで。

「そんなこと、」

一瞬だけ合った視線が離れたので、言い聞かせるように覗き込んだ。捕まえていた手を放す。ゆっくりと繰り返す瞬きと、深めの呼吸。それが疲労だと、悠花はまだ理解していない。

「ほら。瞼、重いだろ」

気まずそうにまた視線をそらそうとするのを、ふっと微笑んで留めた。それでやっと納得したのか、明らかに根を詰めていた肩をやっと下ろした。

「少し休め。俺はまた出てくる。何か困ったことがあったら灯と連絡を取れ。いいな？」

幼子にするように頭を撫でてやる。嫌がられるかと思ったが、良いようにされているようなので、そのまま二度三度と繰り返した。そうすれば、撫で付けるリズムに合わせて更に瞼の動作が遅くなる。

「……白城さんは……？」

生理的な意志に抗うようにして声を絞り出す少女。そうしていれば本当に年齢よりもずっと幼いように思えて、白城は一層声の響きを優しくする。

「すぐ戻るよ」

無言で頷いた様子を見守って掌を離す。ちらりと見上げ返された瞳が不安そうにも見えて、もう一度手を伸ばして、微笑んだ。

薄暗い世界にも朝はやってくる。

正しい時間の流れは定かではないが、腕時計の時間を頼ればもう事務所を出てから二日半は経過している。

結局浪費したのは時間だけで、身内から聞き出した情報も、探し人の立ち寄りそうな場所も、四方巡ってみてはいたが成果は上がらなかった。本当は助手の少女がいないうちに片付けようと思ったのに、やはり簡単に上手くはいかない。大人しく情報屋が目星をつけるのを待っていた方が早いかもしれない。

地下鉄を出て路地裏を進む。大通りより近道ということもあるが、何より通り慣れた道だった。昼を過ぎたばかりだというのにビルの合間は暗くて、どうかすると掠れたネオン管などが早々に店の名前を縁取っている。

旧年代の遺物のような表と背中に板を張り合わせて客を呼ぶ男。身体のラインが如実に浮かぶ、きらきらした衣装に身を包む女達。そのうちの顔馴染みが目敏く白城の姿を見つけては、通りの反対側からも快活な声を上げる。

「シロさん、寄ってかないんですかぁ」

体をすっぽり包むコートと、ネイル。顔を集めて談笑していた数人が手を振って寄越す。それに片手で遠慮を示して、

「悪いけど、今忙しいの。またまとめて稼いだら遊びに行くよ」

絶対ですよお、と残念そうでもない笑みで、きゃらきゃらと手を振る女達。この辺りはとりわけ昼夜の区別などあってないようなものだ。

+++

「はい、あたしの勝ち」

それはある日の昼下がり。

テーブルを挟んで向かい合わせに座る二人の眼前には、白と黒の石が並ぶ正方形の板が控えていた。ただでさえ物の多い白城のデスクの上に、無理にスペースを作って広げたボードゲーム。しかし今その緑板の上には圧倒的に暗色が多い。

「あんた本っ当“オセロ”弱いわね。白か黒かで統一していただけなのに、どうしてそんなに手こずるのよ」

高座灯(タカクラアカリ)は、僅かに存在を主張する白色を四つまで数えてから同情の息を零した。

彼女のほうはファッション誌まで開いて片手間だったというのに、いつの間にか端末をシャットダウンしてまで挑んだ結果がこれだとは、当人でなくても溜息を吐かざるを得ない。

「得意分野はカードなんだよ」

すっかり不貞腐れて、緩慢と目を逸らす。

「それも賭け金がないと調子が上がらないとか。つくづく手本にならない大人なんだから」

ぶつぶつと何かを言う白城。力なく咳払いをしてパソコン本体のスイッチを押したものの、待ちきれずに引き出しから新聞を出して広げた。

そうしているうちに、ボードゲームを片付けて漸く見えたデスクマットの上に、丸盆を抱えた少女の影が写る。

「あの。珈琲、入りました。高座さんもどうぞ」

「わあ、ありがとう」

「さんきゅ」

灯が太陽のように微笑めば、緊張した面持ちで頭を下げた。灯の分と、白城の分をひとつずつ丁寧に置く。それからぺこりと一礼して立ち去る。

やがて自分の席に戻って、再び必死に慣れないキーボードをぼちぼちと突っつき始めた。時折ハンターのような目で画面を凝視しながら。

「――猫だよなあ」

「なにが？」

珈琲をずっと啜ってから、灯が不思議そうに尋ねた。白城は誰とは口にしなかったが、その視線は端末に奮闘する少女の後姿に注がれていた。

「捨て猫を拾った感じに似てるんだよ。人になついてんのか、家についてんのか。空腹を満たしてくれた恩義を感じてるだけなのかもしれない」

灯は黙ったまま、いつになく感慨深げな白城の言葉に耳を傾けた。がさり、折り返した新聞紙が濁いた音を立てる。

「いつかきっと、来た時みたいに、ふらっと出ていくんだろうな」

「たしかに、シロには勿体無いくらいの美人猫だものね」

すっかり読み尽くしてしまった雑誌を、丸めて屑籠に棄てる。チャコールグレーのパンツスーツで器用に足を組み替えながら。

「本当はどこかで飼われていた血統付きなのかもね。本物の飼い主が見つかったら、もう戻ってこないかもしれない」

セルフフレームの内側から、問いかける眼差し。白城がそれを目の端で迎えて、数秒間の無言の中でお互いの主張を探る。

けれど、白城の目には普段と同等の倦怠さしか無くて。僅かに滲んだ寂しげな色が、どの虚しさを受けて作られたものなのかは、仕事仲間である灯にすら読み取ることは出来ない。

猫を、養う気はあるのか。

それともいつか逃げられてしまうのか。

華奢な首筋、澄ました無表情。

自分だけのお気に入りの日溜まりを見つけた猫は、きっと振り向くことはない。
けれど。

「それが本物の幸福なら、それに越したことはないさ」

しかし、長い間一人だった『人間』には知る術がない。猫のお気に入りの日溜まりが一体何処に在るのかなどは。

だから拾い主の男は、物分りの良い人間の顔をしたまま、独り煙草を燻らせる。今はまだ足元で丸くなる、毛並みの良い猫の背を撫でながら。

+++

さすがに重くなった体を引き摺って、漸く住処にしているビルまで辿り着いた。正面入り口の自動ドアは立てつけが悪く、最初から非常口の柵を越える。

剥がれの目立つモルタルの壁に沿って上階を目指す道すがら、階段の中央に陣取る毛玉の塊に遭遇した。つやつやの毛並の中に四肢を折り込んで、急にやってきた客人のことなど微塵も気に留めず、悠々と寝息を拵えていた。ロシアンブルーの首元には、きちんと山吹色の首輪が隠れている。

あと一段まで近づいても、髭ひとつ揺らさないその住人に、根負けするのは白城のほうだ。踏みつけてしまわぬように、起こしてしまわぬように、ゆっくりと足の置き場を選んだ。

ぐるぐる、喉の音が聞こえる。どうやら良い夢を見ているらしい。その様子には、つい手を伸ばしてしまいたくなって。

「やっぱり、猫だよなあ」

思わず、事務所で留守番をしているはずの少女を思い出した。

指先は、ひやりと冷たくて。

一人きりのフロアに、ふと電子音が鳴り響く。

それが白城のデスクの上の黒電話だと気が付いて、悠花は慌てて彼の机に駆け寄った。間延びしたコール音が五回目を終える前に受話器を上げれば、聞きなれた声が少女の脳へと届いた。

「はい。第七テナントビル、事務所です」

『こんにちは、悠花ちゃん』

「高座さん？」

ひとり？という声に受話器越しに頷き返しかけて、はい、と答え直す。

「留守番なんです」

『ああ、そっか。あいつ副業に出てるのね』

それから、他愛もない話題に花を咲かせること数分。と言っても悠花は相槌を打つのが殆どで、時折灯の投げかけてくる質問に端的な答えを返すのが精一杯だった。

淋しくない？と灯は尋ねる。悠花は、平気ですと首を振った。

『あたしも仕事がひと段落ついたら遊びに行くね』

「ありがとうございます」

また癖で丁寧に頭を下げる。肩まで届いた、髪質の柔らかな悠花の髪がさらさらと揺れる。

事務所の中には彼女の声と、遙か遠くを駆けていく列車の音。ブラインド越しの空は相変わらずどんよりしていて、鳥の一羽も飛んでいない空は灰色に凝固してしまっているように見えた。

あまりに静かな空白に、思わず窓の外を眺めていた。ふいに吹き付けた風が換気扇を回して過ぎていく。

ゆっくりとした瞬きのあと、灯の声が悠花の意識を事務所の中へと呼び戻した。

『それでね、あなたの所をお願いしたいことがあるんだけど、いい？』

灯から提示されたのは翌日の正午前で、厳密な時間の指定がなかったために悠花の行動は普段通りあまり左右されなかった。今日も朝から今まで、分厚いファイルと睨み合いながら入力作業を続けている。本当は悠花の仕事ではないし、第一急ぎの内容でもないのだから、こうしてせつせと作業することはないのだけれど。

それでも何かに打ち込んでいなければ、この空白はあまりにも長い。

分厚い綴りの漸く半分を過ぎた頃、事務所の入り口の磨硝子に人の影が映った。呼び鈴もインターホンもない代わりに響くノックの音。悠花が返答すれば、恐る恐るといった風にドアが開き、初老の男性が顔を見せた。知らない人間だった。

「こちらで、新聞を見られると聞いてきたのですが」

その言葉に、彼が灯の言っていた客なのだと気づく。フェルトの帽子に同じ色の背広姿で、身嗜みに気を使っているのだと知れた。帽子を取って会釈をするので、悠花は立ち上がり、男性を

迎え入れた。

「日本のものに限られますが……日付はいつですか」

「2011年の、3月15日です」

「新聞社の指定はありますか」

簡単に二、三要望を聞き、男が必要とする新聞を棚の中から探し出す。2011年のものであれば先日整理したばかりなので留守番役の少女でも代替が可能だった。

硝子戸の鍵を開けて、三月の棚から一部を引き抜く。念のため、前後1日分ずつの新聞も一緒に取り出した。

来客ソファに腰掛ける男に手渡せば、彼はすぐそれを読み始めた。熱心に食い入るように一枚一枚と捲っていく。その様子を少女は、自分の席から見ていた。

「――ああ」

液晶画面に没頭していた少女の耳に、刹那、男性の嘆息が届いた。

顔を上げる。残念ながら悠花の席からは背中しか見えなかったけれど、彼が此処に入ってきた瞬間の緊張感が解け、今は安堵の色に変わっているのが分かった。

「あった。そうか。じゃあ、すれ違ったのはやっぱり彼女だったんだ」

それは独り言だと知っていたので、黙ったまま彼の背中を見詰めた。そうか、と、何度か頷き重ねる客人。他の月のものより大分薄い新聞。反して大きく見開きの見出し。彼は愛おしそうに紙面を指でなぞった。

「これ、借りることはできますか」

穏やかな表情が振り返ったので、促されるように席を立った。そうして部屋の隅の大柄な機械を指差した。

「コピーなら取ることが出来ます。1枚10円かかります。どうしますか？」

「お願いします」

悠花が予想した通り、彼の返答は明快だった。

また少女は一人きりになった。

一人きりになってから、夜が来て朝がやってきた。此処に来てからというもの、こんなに長い時間を一人で過ごすのは初めてだった。

暗くなってから悠花は同じ階にある居住スペース――と言ってもベッドと据え置きの家具しかない殺風景な部屋だけれど――に戻って、あまり眠くもない体を横にして時間を経過させていた。もしかしたら、少くくは眠りに落ちたかもしれない。けれど、夢すら見ないこの夜では、針の進む速さなど一定ではなかった。

物音がした気がした。

目を開ければ、いつの間にか薄い遮光カーテンの外が白く綻んでいた。夜気ですっかり冷えた床の上に両足を下すと、ひたり、心のほうへ冷たいものがせり上がってきた。

予感がした。物音はもしかしたら幻聴かもしれないけれど。室内用のスリッパが見当たらなかったもので、素足のままで廊下へ出た。

辿り着いた磨硝子の先に気配を感じた。ドアノブを廻せば、昨夜かけたはずの鍵が開いていた。

起き抜けの、薄い紗幕のかかった記憶のまま、ゆっくりと鉄製のドアを押し開ける。ブラインドから真っ白な光が注いで、室内に埃の影を浮かび上がらせている。

新聞やファイルに埋もれた部屋の姿は普段通り。少女が昨夜電気を消した瞬間と変化は見られない。積み上がったバインダー、古新聞、スクラップノート。それらが床から事務机までを支配している。

少女の机の上には蓋の閉じた端末。この部屋の責任者の机にも変化は見られない。けれど唯一。

単色の朝日が室内を照らして埃の影をつける。応接セットのテーブル。それを囲む二人掛けの皮のソファ。その上に、身体を投げ出している誰かの姿。

否、それが誰かなんて、悠花には顔を見る前から分かっていた。からからと回る換気扇、それに重なる嘆息の声。スーツ姿の背格好、疲労に染まった白い顔。

「白城さん？」

それは呼びかけではなくて、驚きによって発せられた独り言だった。自分の声が想像よりも強く響いて、悠花はとっさに口を噤んだ。

彼女の心配を余所に、白城は良く眠っているようだった。

横向きに、窮屈そうに身体を折って目を閉じる白城の姿。その眉間に僅かに皺が寄っていても見間違える筈はないけれど、思わず傍に近寄って確かめたくなる程には久々の再会だった。

おそらく部屋に戻るのが億劫で、仮眠のつもりで此処に横になったのだろう。今は身動きの呻き声を交えながら、自分の上着を掛布団代わりにして顔を埋めている。

悠花は、まだ夢か幻想か分からないまま、ぼんやりと彼の様子を眺めていた。ソファの背の側から彼の顔を遠目に覗き下して、やがて何かに気付いたように来た道に戻った。

再び事務室に現れた少女が抱えてきたのは、一枚の毛布。

その瞳から彼女自身の意思は読み取れない。白城を覆い隠すようにふわりと毛布を掛けて、ただいつものように真剣で。口を引き結んだまま、ソファのすぐ傍に立ち止まる。今度は正面から、ソファの肘掛部分に頭を預ける白城の顔をじっと見詰める。

息も殺したまま。

白城の、ひとえに身嗜みに気を使っているとは言い切れない前髪がその顔を半分隠している。それがとてももどかしかった。だから悠花はまるで導かれるように、真っ白な指を彼の顔に差し延ばした。頬にかかった髪を掻き避けるために。

指先がかすかに顔の表皮に触れる。その些細な違和感に白城の眉が反応する。

けれどそれは一瞬のこと。慌てて引っ込めようとした指先は、ふわり、彼の手に捕えられてしまう。

驚いて声を上げようとして、息を呑む。見れば白城は目を閉じたまま、ただ寝ぼけているのだとすぐに知れた。

一瞬だけ強く引かれたと思った掌は、間もなく力なくソファの上に落ちてしまった。それでも尚、悠花の腕を取ったまま。

振り払うのは簡単だった。逃れようと思えば容易くそう出来るはずだ。それでも悠花はそれがどうしても出来ずに、どうしても抗いたくなくて、そのまま手の届く場所、ソファの足元に座り込む。

裸足のままで床は冷たい。それが心地良かった。毛布の間から伸ばされた掌。前髪で隠れたままの横顔。それだけは空いた左手で掬い避ける。眉間に寄っていたはずの皺は消えて、気だるげな唸りも聞こえなくなっていた。

白城が枕代わりにしている肘置きにこっそり背中を預ける。振り向いて覗き込めば、すぐそこに彼の顔がある距離に。

時折吹き付ける風の音。それ以外はどんな音も聞こえない。代わりに覚える、よく馴染んだ煙草の匂い。

いつしか指先は離れてしまっていたけれど。

それでも悠花はソファに凭れたまま、次第に明るくなっていく空の輝きを見ていた。

「おかえりなさい」

目を開けたことで、悠花は自分が今まで眠っていたのだと気付いた。

部屋を見渡すつもりで身体を起こした。先刻まで朝焼けに霞んでいた空も今はすっかり灰色で、大分時間が過ぎていることを知る。

それから、自分がソファに横になっていたこと、身体に見慣れた毛布とジャケットがかけられていることも。

僅かに紫煙の香りのする上着。数日間無人だったデスクには灰皿と吸殻。けれど、室内には肝心の誰の姿も見当たらない。

夢だったろうか。それとも、今見ているこれこそが夢か。毛布を半分被ったまま呆然とブラインド越しの空を眺めていると、ふいに彼女の耳が食器の擦れる音を拾った。

カチャカチャと硬質なその音色はいつしかすぐ側に。視界に影が落ちて見上げれば、目の前に真っ白なマグカップ。そしてココアの香り。悠花はぼんやりと座ったまま。

「おはよう……ございます」

その眼差しへ、まだ夢見心地で応える。相手は柔らかく微笑んだ。白城だった。

「ばっちりだったな。タイミング」

彼は差し出したマグカップを悠花に握らせると、自分のデスクへと戻った。そこには読みかけの新聞が広げられていて、左手でコーヒーの入ったカップを持ったまま器用に折り返した。

悠花は温かい陶磁の感触を確かめてから、冷えた唇を触れさせる。

「――ありがとうございます」

ほろ苦く、甘い。いつも飲んでいるものとは違う味。

けれど、白城がさっき持っていたカップの香りはそちらのものだった。悠花がよく彼に淹れるものと同じ、砂糖もクリームも入らない飲み物。つまりこのホットココアは、悠花のために淹れられたもの。

もう一口。マーブル模様が溶けて、みるみるうちに現実が確立されてゆく。ここは事務所で、白城は今確かにここに居る。朝方に彼の姿を発見したのも、幻想ではなかった。

それにしても、自分は確かに床に腰下していたと思ったけれど。ソファで眠っていたのは白城のほうだったはずだけれど、これは一体どういうことだろう。

「どれくらい経った？」

「4日くらい、です」

尋ねられたままに悠花が返せば、そうか、と思案顔で珈琲を飲み下す。

「長い間留守番させて悪かったな。何か問題は起きなかったか」

悠花は短いようで長かった時間経過を思い返し、責任者である彼に伝える必要がある出来事を探した。しかし基本的に人の出入りの少ないこの事務所では、取り立てて懸案事項は見つからない。

「いえ。でも、お客さんがありました」

首を振ってから思い直すと、白城はちょっと眉間に皺を寄せて、

「そっか。ありがとな。助かった」

視線が端末と新聞越しに少女へと届く。少女は小さく頷いて、毛布の内側から外の世界を窺っていた。そう、自分が毛布の中のままだということを思い出す。

ソファの上で丸くなって、やがて、そろりと床に足を下ろした。目に映る光景が正常な角度になる。傾いでも歪んでもいない、普段の自分自身の視点。だから俄かに白城の様子が気になって、右手をカップとキーボードに行き来させている姿を盗み見た。左手は新聞を放さないまま。両目も基本的には新聞のほうに向かっていて、時折キーボードを叩くのに合わせて液晶画面を確かめている。

ややあって、白城が口を開いた。

「沙月と連絡が取れた。詳しくは聞いてないが、どうもアタリがついたらしい」

彼が何の話をしているのかは悠花にもすぐに理解できて、ほんのちょっとだけ背筋に力を入れ直して彼の顔を注視する。

その名前は勿論悠花も覚えていた。数日前、白城に連れられて会いに行った情報屋の名前だ。白城は助手が自分の方を見ていることに気づき、心なし顔を上げた。

「それで、俺はまた暫くしたら出掛けないといけない。今度はすぐ帰れると思うがー」

視線を少女の方へと確実に向ける。

「また留守番頼んでもいいか」

問い掛けの形を取っているが、悠花の返答など最初から一種類しか用意されていない。だから彼女は簡潔に、ぐい、と顎を引く。

「はい。大丈夫です」

しかし白城が気付かない訳は無かった。言いながら、あからさまに表情が暗くなったこと。暗いというよりはもっと複雑で、怒っているとか呆れているとかいう感情よりは、不服そうにも残念そうにも、哀しそうに見える。

黙ったままココアを飲む悠花。それ以上何を問い返すでもなく、只々気落ちしているのが見て取れる。それはどちらかというと『待て』を指示されている犬のようでもあって、加えて白城は彼女に対しては滅法甘い傾向があるので、

「ーと、思ったけど。どうするかな」

苦笑して呟けば、落ちていた悠花の視線が戻ってくる。小首を傾げる様子は、やはり小動物のそれに似ている。白城はちょっとだけ口角を上げたまま、冗談のつもりで尋ねる。

「なんて顔してんだ。そんなに留守番は退屈か？」

「はい」

真っ直ぐな視線。返事は思いもよらないものだった。

「ハル？」

「……いえ。なんでもありません」

反射的に確かめると、少女にも自覚があったのか、罰が悪そうにまた目を伏せる。明らかに動

揺しているのが新鮮で、思わずまじまじとその表情を見廻してしまった。

悠花はというと白城の視線には気付かないふりで通したいようで、明らかに彼のほうを気にしている割には目線は絶対にかち合わなかった。早く白城の関心が逸れることを今か今かと待ち望んでいるようだった。

それでも、どこかの誰かのように気さくに話題が転換できる性格でもなくて。

「しゃーないな」

微笑み、こめかみの辺りを搔きながら。溜息ではなく嘆息で、呆れというより喜びで。

決断するのはいつだって上司の仕事だ。保護者と言い換えてもいい。こんな寂れた街に迷い込んだ一人の少女の。

「スポーツ欄を読み終えるまで時間があるから、着替えておいで」

悠花の顔が目に見えて明るくなる。

だから白城が、ただし、間に合わなかったらおいて行くぞと付け加えたのも大した効力を持たなかった。ぴしりと姿勢の良さを保って、二つ返事で立ち上がる。逸る気持ちはそわそわと抑えつつ、なんとか彼の話を最後まで聞こうと意気込んでいた。

白城が頷いて見せると、少女は大急ぎでドアの外へ出て行った。いつもより速足で、慌て気味で。少し離れた場所でドアの閉まる音がして、彼女がすっかり部屋に辿り着いたことを確認する。

応接セットのテーブルの上には置き去りのココア。毛布は悠花が今抱えて帰ったし、白城のスーツのジャケットは、いつの間にか丁寧に畳んでソファの隅に置かれていた。

一人だけになった部屋の沈黙は淋しくも耳に心地良かった。だから安心して、自分だけの独り言をそっと零す。

「.....あんまり良いことじゃないと思うんだが。仕方ないか」

見詰めるのは閉ざされたばかりの事務室の扉。思いを馳せるのはまだ経験の浅い少女のこと。純粋な器には些細なスパイスさえ刺激が強くて、あまり味わってしまえばいつかは身体を蝕む毒になる。毒を毒と気づかないまま帰れなくなった人間を、白城は自分の職業の中で嫌というほど見てきたのだ。

そうは言えど、真実を知らせなければいけないという事実。それがいまぶち当たっている傷の程度とは関係なく、それでも悲観しすぎることはなく。だって遅かれ早かれ、それが本物だと言うのなら。自分たちが通る道は同じなのだろうから。

それに、今の白城には少しの自信が残っていた。それだけで充分すぎる程だった。

大丈夫。迷子になったら探しに行くよ。

正面きってそう言葉にすることはないけれど、その根底にある感情は決して偽物ではない。

あの小さな指先をぎゅっと掴んで、彼女が消え去ってしまういつかが来ることに臨んで。

「いい香りね」

来客ソファにゆったり腰掛けて、高座灯が白磁のカップを傾けている。正面にはカップがもう一つ。時計の針の音ひとつしない室内は、その香りだけでどこかの英国庭園でのティータイムに変貌する。

「たまにはいいわね。むさいおっさん抜きでお茶にするのも。本当はあたし紅茶派なのよね」

ハーブティーも好きよ、と付け加えて微笑む彼女に、悠花は、

「じゃあ今度からは紅茶を用意しますね」

そう言って自らもベルガモットの香りを楽しんだ。

これは少し未来の一場面。

テナントビルの最上階にある事務所で、また一人で留守番をしている少女の元へ、いつかの約束通り灯が遊びに来たある日のことだ。彼女はお気に入りの茶葉を手土産に、きっと退屈しているだろうと悠花の様子を見に来たのだった。

灯は普段通り、かっちりとしたパンツスーツ。赤めの髪を器用に後ろで纏め、その鼻先にはアメジスト色のセルフフレーム。いつだって彼女は『働く女性』そのもので、悠花はそれを知ってからも認識に変化はなかった。

「ありがとう。こうしてお喋りして相手の趣味を知るのはとても素敵なことね」

「はい。私もそう思います。ただ、私はあまりお喋りが得意じゃないですけど」

それから、がんばります、と手振りを加えて意気込んでみる。こうしてみれば、悠花も随分この環境に慣れてきたように思える。

「努力はいいことね。前進するということは有意義だわ」

大儀そうに足を組み替えては、ふと天井を見上げた。年季の入ったロックウールの天井版。建てたときのままのそれらは所々くすんで、隅のほうは欠け落ちているものもあった。

「本当は何もかも無意味なのよ。事務所を成り立たせることも、偽善的に人助けをすることも、あいつが好んで吸う煙草も、珈琲も」

ふうっと宙へ向かって溜息を吐いた。埃の影が絶え間なく揺れる。まるで波紋のように部屋全体へと広がっていく。

「『過去』のことなんてどうでもいい。それでも、無意味でも、あたしたちは身体に染み着いていた習慣を懐かしんで、誰かを愛したことを思い出しながら待ち続ける。そうするしかないし、そうしていたい。この身がついに消えてどこかへ廻り出づるまで」

悠花は、彼女の言葉を真っ直ぐに聞いていた。手放したティーカップの中にも小さな波紋が広がって、すぐに見えなくなる。抑揚も薄く形作る言の葉は、今も尚空中を歪ませている。

「あたしの本当のことはシロから聞いている？」

「はい」

唐突に向けられた眼差しに、悠花はややあって頷いた。肯定に引かれた顎。灯がここに来て僅かに口角を上げる。その表情はどこか皮肉めいていた。

「変なやつだって思ったでしょ。この喋り方も元々は、女に間違われるのが面倒で始めたことだけ。でも、今は気に入ってるの。綺麗に着飾ることも、あたしにとって意味有ること。最後には何も残らなくても、今こうしていることが無駄で無意味だとは思わない。だってそうでしょう？ あたしたちは留まることを許されているんだから」

それが良いことか悪いことかは、置いておいて、ね。付け加えて、目を細める。

堪えきれずに悠花は首を振った。握り込んだ自分の手に、ぎゅっと力を込めて。臆病な震えを押し隠すように、それでも懸命に灯を見る。

「変なんかじゃありません。それに私も、此処にいることが無意味だとは思いません。此処に来たから私は高座さんや白城さんに会えたんです。だから、後悔もしていません」

悠花の真っ直ぐな言葉に灯は幾分か呆けていた。それからすぐ今度はいつものように女性的な微笑を浮かべて。

「悠花ちゃんは、本当に可愛いね。シロのものでなければあたしのものにしたいのに」

少女が首を傾げれば、灯は益々愉快そうに笑った。

「うちの事務所って男だらけなの。こんな可愛らしい花が一輪でも咲いていれば毎日の仕事も楽しいのに」

悠花は僅かに目を伏せる。小さく微笑んで、今度はゆるゆると首を振る。

「多分、白城さんは私のことなんてなんとも思っていないよ。……もしかしたら、迷惑に思っているかもしれないけど」

無意識的に目を向けたデスクは相変わらずファイルの山が堆(うずたか)い。白城が事務所を空けてからまだそれ程時間は経っていないはずだ。それでも客足はぽつぽつと途絶えることなく、日によっては何人も、自らの過去を探し出そうとこの倉庫にやってくる。

こんなにデータが蓄積していても、それでも、自分の過去を探す気にはなれない。それは灯の言葉通りだった。この世界では過去は無意味だ。此処では何物も自分に意味など見出せず、その代わり何よりも自由に自分という存在を形成するに至っている。

だから彼女――彼は、純粋な眼差しで問い返す。真っ当な疑問だった。

「じゃあ、悠花ちゃんは どうしてシロの所にいるの？」

「それは……」

そう、悠花がこのビルにやってきたことも、全ては意味のあること。

二人は海辺を歩いていた。海岸沿いに張り巡らされた落下防止のフェンスは途中で大きく敗れていて、真っ白な花が手向けてあった。

それを横目で見ながら埠頭へ向かう。波消しブロックの上に座っている人影を見つける。
「ムトウヒデトさんだな」

振り向いた顔は見覚えがあった。何度も目を通した、探し人のデータの中には写真も含まれていた。

男はゆっくりと振り返る。何の感情も窺えない、疲労と途方に暮れたその虚ろな色。
「誰だ、君は」

時折彼の足先が波に触れる中、白城は慣れた風に首を傾げるポーズを取った。
「別に、ただの人探しをやってるもんだよ。そして、俺達が今探してるのは、まさにあんただ」
両手さえズボンのポケットから出さないまま。それからやっと、思い出したように自身の象徴でもある紙巻き煙草を啜る。

「お前の奥さんが探してる。非公式だけど検索願いがあってね」
「妻が……？」

潮風に掻き消される。真っ白な煙が、灰色の空に溶ける。
「そうだよ。面会に行ったら既に姿が無かったって、名簿を何度確認しても、あんたの名前が抜け落ちてることに気付いたらしい。早く戻ってやるんだ。手遅れになる前にな」

「冗談はやめてくれ。妻がそんなことを言う筈がないだろう」

男は初め、突然現れた奇妙な男の話をもんやりと聞いていたが、やがてその内容が不可解であることに眉を顰めた。そして果てには、妻の話題を出す煙草の男に不快感さえ示した。

やや強い口調の否定。幽愁さえ感じられる鋭い目。男は遊ばせていた足で立ち上がり、白城に侮蔑の眼差しを投げた。

「だって、そうだろう。もうずっと会ってない。当たり前だ。あいつはもう5年も前に先立ったんだから」

男の声が波の上に反響する。それは白城と悠花の聴覚をも鋭敏にさせて、まるで彼の言葉だけが海の世界のすべてかのように透き通り、響き渡った。白城の数歩後ろで悠花は指先の震えを握り締めて堪え、男は尚も言葉を吐き棄て続ける。

「悪いが帰ってくれ。私はもう少し此処に居たいんだ。もうずっと海を見てる。いくら見ても飽きないんだ。此処は家内との思い出の場所でね」

船着場のコンクリートの上で、男が笑う。愛おしげに、懐かしむように。靄で海の果ての水平線など見えもしないのに、その先にある楽園を、妻のいる日々のことをじっと眺める。

蜃気楼を打ち破ったのは白城だった。彼だけは眉根ひとつ動かさないまま、淡々と、男の戯言に耳を貸していた。

癖のように吸っていた煙草は無味だった。先端は赤く照ることもなく、それでも立ち上る煙を現実のこのように眺めた。

「いい加減認めなよ。あんたはもう死んでんだよ」

覚悟していたように、悠花の指先にまた力が籠る。男の顔色が変わった。

「見ただろう、あの突き破られたフェンスを。まだ直されてもいない。車は引きあげられてもう無いが、この光景に覚えはあるだろう」

啜えた煙草は吸えど吐けど味がしない。この世界では呼気概念が違うからだ。こんな場所に男は紛れ込んでしまった。悲しくも独り、自分の知り得ないままに。

「何を、馬鹿な。だって、私は現にこうして――」

その言葉尻をついに遮る。そして真っ直ぐな目で男を、影の落ちていない男の足元を見詰める。

「馬鹿じゃねーよ。とっくに死者なんだよ。俺もあんたも、この子もな」

そして自らの足元にさえ、そんなものは落ちてなどいなかった。

啜えただけの煙草から、ゆらゆらと煙だけが立ち昇っていた。

暗い部屋の中に居た。

床は冷たく凍えるようで、四肢は自由のままだったけれど、立ち上がって部屋を出ることは出来なかった。

吐き出す息が白い。暖房は最初からついていない。伸ばした指の先が鉄の柵に触れて、あまりの冷たさにすぐ手を引っ込めた。

少女はのろのろと、その小さな頭を床に下した。

顔が酷く重そうで、幾度もぱちぱちと重力に逆らうものの駄目だった。本当は、床板が冷たいから横になりたくはなかったのだけれど——その身体は情け程度の毛布に覆われていたが、小学校に上がったばかりの小さな体躯には防寒の足しにもなっていない——睡魔に押しつぶされて頭や身体を打ち付けるよりは利口だと判断したのだった。

何時間も前に運ばれてきたトレーには手を付けていない。泣き飽きて既に赤くもない両目も、閉じてしまえばまた両親のことを思い出してじわりと熱くなる。もう会えないのかもしれないとその小さな心で寂しさを覚えた。もう息は白くなかった。幼い命は徐々に命の炎を弱くしていった。

——ふと、下の階からもやもやと騒々しい気配が伝わってくる。

籠った騒音はどうやら乱暴に開閉される扉の音や何か大きなものが倒れる音のようで、それに混じって時折人の怒声らしきものも混じっていた。

けれど、それらも少女の目を再び開けさせるための切欠までには至らず、やがて静まった階下の異変にすら気付くことも出来はしなかった。

いつの間にか扉の前の気配も消えていた。代わりに階段を上がってくる足音が聞こえて、幾分か駆け足のその気配は、少女の閉じ込められている部屋の前まできて立ち止まった。

「——おい！」

少女が目を開けたのは、自分の押し込められていた檻の扉がこじ開けられ、温かい腕に抱き上げられた後だった。

開かれた扉から日光が差し込んで、自分の顔を覗き込む誰かの輪郭を強く縁どっている。まるで白昼夢の中からそれをみているように。

ぼんやりとその人を見詰めれば、強張っていた気配が僅かに緩んだ。すぐさま柔らかな毛布で少女を包んで、頭や体を打ち付けさせないよう慎重に抱え上げる。

「もう大丈夫だ。さあ、お父さんとお母さんの所に帰ろう」

その低くて穏やかな声が、言葉が、少女を安心させて。

夢の中に落ちる直前に知ったのは、毛布の温かさと、その人から僅かに感じられる煙草の匂いだった。

深夜。倉庫街には絶えず波音が寄せていて、積み上がったコンテナの間を抜けて、潮風がその仄暗さを彼女の元へ運んでいた。

コンクリートで固められた足場。錆びついて半分開いたままのシャッター、腐食した壁の穴。その隅々までを月影が染め上げている。

「ハル」

波音に耳を澄ませる少女の背中に、男が声をかけた。名前を呼ばれた少女は、落ち着いた表情で彼を振り返った。

「何してるんだ」

「月を見てただけです」

そして尚も空を仰ぐ少女の脇に、白城は爪先を並べる。すぐ側にあったアンカーに腰を掛けて、黙ったまま同じように世界を眺めた。

「あの人、ちゃんと奥さんのところに帰れたでしょうか」

波間に響く、独り言に似た彼女の言葉。白城はちらりと表情を窺って、
「大丈夫だろ。敗因は、分かっていなかったってことだけだから。愛する人の傍に居られればもう迷うこともない」

フィルターから唇を離し、持ち替えた指先で揺蕩う白い筋を目で追いかける。この味を思い出すには、自分達の街へ帰らないといけないけれど、今はもう少し、こうして海を味わうのも悪くないと、ふいに思った。

「沙月も言ってたけどさ。死者と生者の違いなんて俺達にとっては些細なものなんだ。何を持って死とするか。何を持って生きていると定義付けるか。本当は表裏なのかもしれない」

掲げた紙巻き煙草で示すのは、海の果てに浮かぶ銀色の深淵。悠花は白煙に導かれるように深い空の色を見る。

「月の裏側、ですか」

白城が頷く。

「そういうことだな。俺達は、生きてるか、死んでるか？ 生の定義が魂の所在なら、俺達の存在はどうだ？ どうして今ここで月を見てられるんだ」

悠花は黙ったまま、今の自分にその問いに答えられるだけのものが無いことを嘔みしめていた。情報屋のように境界について詳しいわけでもないし、白城や灯のように『向こうの世界』に留まっている期間も長くない。

何より、生者として得た時間そのものが少ないのだ。彼らにさえ出せない答えを、自分自身が探し出せる筈もない。

「取るに足りないことなんだよ。無意味だし、何より、思い悩むのは有意義じゃない。そういう意味では、俺達は恵まれてるのかもな。もう悩む必要はない。自分の欲するものだけを選び取ることが出来る。ただ、悩むことが好きで、それでも納得出来ないなら、ゆっくり考えればいい。なに、時間だけは腐るほどある」

白城が掌を開いたせいで、それは波に触れると同時に掻き消えて無になった。こうして彼らの手放したモノは、いつか向こう側のあるべき場所に戻る。こちら側には何も残すことは出来ない。白城にすらその仕組みは理解出来ていなかったが、そういうものだと割り切ってしまうと不思議でも何でもなかった。

悠花は暫く月を眺めていたが、やがて思い至ったように白城のほうを振り向いた。

「そういえば、白城さんは結婚されていなかったんですか？」

「結婚してたらもう少しマシな人生だったろ」

ほんの少し眉を寄せて、それから仕返しとばかりに悠花を見上げる。

「お前は？ カレシとかいなかったのか」

「そういうのはいいんです。必要ないから。それに、もう無意味でしょう」

こちらは特に気分を害した風でもなく。ちょっと悪戯に微笑めば、瞳がくすぐったげに揺れた。それを受けて、白城が右の唇の端を釣り上げる。

「じゃ、お互い様だ」

肩など凝る筈もないのに、大きく伸びをしてから立ち上がった。それにしたがって悠花もまた一歩後退する。

月に照らされて、実体のないはずの輪郭が強く陰を引いた。銀色の光を纏う二人はまるで陽光の下に照らし出されているように見えて。その白城の横顔を盗み見ながら、悠花は、自分には必要な過去のことを思い出していた。

あれはまだ幼い頃の話。その救い主の名前を知ったのは、それから何年かしてからだったけれど。

「私はあなたのおかげで、生き長らえることが出来たんです」

既に背を向けていた白城が、ふいに怪訝そうに足を止める。

「何か言ったか？」

「いえ。なんでもありません」

悠花は柔らかに笑んで、首を振るばかり。だからそれ以上のことを、彼もまた問い返すことはしない。その代わりに、これからの帰路の旅路を、迷いはぐれてしまわぬようにと手を差し伸べて

。

「さて、俺達も帰ろうか。あんまり居ると追い出されちゃう」

「はい」

悠花は頷いて、大人しくその手に導かれることにした。

ひどく冷たいのひらだと思った。

人のぬくもりなんてもう何年も前から知らないけれど、それでも記憶の中にある人間の体温

はもっともっと高くて、じりじりと焼けるように高くて。

己の存在自体を焼き切ってしまうんじゃないかというくらいに。

水晶の鋭さにも似た、一回り大きな掌。少し伸びた爪の先。鼻をつく煙草の匂い。

呼吸も、心音も、存在しない。

『私達』は、ただ『次』を待つだけの存在でしかなくて。

けれど。

そのてのひらは冷たいのに、ひどく愛しいと思った。

End.

ニン テイ ユウ ヨ

認定猶予

<http://p.booklog.jp/book/44235>

著者：篠宮朝斗

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/asatoiro/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/44235>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/44235>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.